
仮面ライダーデュエル

矢部小路 X X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーデュエル

【Nコード】

N8822P

【作者名】

矢部小路XX

【あらすじ】

デュエル・マスターズ…それは、相手の5枚のシールドを、光・水・闇・火・自然の5つのカードを使って撃破し、トドメを刺す、カードゲームである！！

これは、デュエル・マスターズを愛するデュエリスト、そして人々を守るべく戦う仮面ライダー、二つの顔を持つ高校生の物語である！！

ターン1 謎の腕と仮面ライダー（前書き）

2011年第1弾です。

まずは、小手調べと言つ事で…。

ターン1 謎の腕と仮面ライダー

「よし、勝った…。」

「ここは、カード・ショップ「こまどり」。

今ここでは、デュエル・マスターズの大会が行われている。

そして今、勝ち名乗りをあげたのは、高校生デュリスト「海藤 はやと」。

この店の常連客で、かつてデュエル・マスターズの全国大会で優勝した事がある、名づてのデュエリストだ。

「おめでとうっす。」

「ありがとうございます、ひより先輩。」

今彼に言った女性は、この店でバイトをしている女子高生・田村ひより。

はやとの先輩で、デュエル・マスターズの師匠でもある。

大会が終了し、はやとが帰ろうとした時。

「あ、ちよつと待ってッス。」

「どうしたんですか?」

ひよりがはやとを引き止めた。

「最近、薄気味悪い話を聞いたんッス。」

「薄気味悪い話?」

頭に?マークを浮かべ、きよとんとした表情をするはやと。

「空飛ぶ腕ツス。聞いた話だと、小学生位の大きさの腕が宙を舞っている、って。」

はやとは、どうリアクションを取ったらいいか分からず、混乱していた。

「先輩、考えすぎです。きっと、手袋か何かか風で舞っただけですよ。」

「…そうかなあ。」

何か納得いかないひよりであった。

「とにかく、その腕に気をつけて。何が起こるかわからないツス。」
「わかりました、先輩。」

その帰り道。

きゃあああああ!!
うわああああ!!

人々が逃げまどつているのが見えた。

何があつたと更に見ると、そこにいたのは、デュエル・マスターズにおけるクリーチャーと呼ばれる怪物のリアルな姿であった。

「えええええっ!!…ほ、本物のクリーチャーアアアアツ!!」

しかも暴れているのが、火文明のヒューマノイドと呼ばれている種族の一体、喧嘩屋タイラーである。

左腕を巨大なハンマーに改造してあるタイラーは、それを振り回し、はやとのいる所目掛けて突っ込んでくる。

「ま、まずい！！こっちに来る！！」

と、はやとの肩をポンと叩く者がいた。

『こっちだ！』

それに引つ張られるままに、路地裏に非難するはやと。

「今のは一体…。」

すると、はやとの目の前に、小学生位の大きさの腕が、宙に浮いていた。

「ぎゃああああ！！」

『大丈夫、俺は悪人じゃない。…俺の名は、切札勝舞。』

勝舞の名を聞き、はやとは驚いた顔をする。

切札 勝舞…デュリストならば誰もが知っている伝説のデュリスト。その強さ、正に無双。

特に、ドラゴン系を使わせたら向かうところ敵なし。

そんなデュエリストが、今手だけ現れている。

摩訶不思議な話ではあるが、現にはやとの目の前に、それはあった。

「あ…あの…、僕に何の用でしょうか？」

『今の実体化したクリーチャーを見ただろう？俺は、あいつらを追ってこの世界にやって来た。』

「はあ…。」

その勝舞の腕：勝舞ハンドは、はやとの周りをぐるりと眺め、何かを思索した。

『そつだ、お前デユエマは好きか？』

「あ、はい。」

『なら、話は早い。まずは、これをやるよ。』

そう言うと、はやとの腰に石つぽい固まりをあてがい、指をパチンと弾く。

するとどうだろう。

石つぽい固まりは光を帯び、ベルトに変わった。

「わっ、な、何ですか、これ。」

『まあ慌てるな。次に、これをやるよ。』

勝舞ハンドは、はやとに4つのメダルみたいな物を渡した。メダルは赤一枚、黄一枚、緑二枚あり、何かに似ている。

「え〜つと、これって…。」

『そのカードを腰にある円形のくぼみにセットするんだ。』

「ええええつ！！こ、これカードなんですかあ！？」

『こいつを使える様にするために、形を変えてあるんだ。さあ早く』

『！』

はやとは勝舞ハンドの言われるままに、メダルらしいカードをくぼみにセットした。

『そして、右腰にあるこのDスキャナーでカードを読み込むんだ。』
「う、これ？」

はやとは右腰にあるDスキャナーを手にし、ベルトの中央を45度に傾け、スキャナーを滑らせる。

カキン！カキン！カキン！ドッギヤーン！！

『ボルシャックドラゴン・アルファデイオス・デュアルファンゲ！
ボル・ファ・ング、ボル・ファ・ファ、ボル・ファ・ング！！』

はやとの周りをメダルが巡り、そして三つのクレストが一つに合体し胸にはまると、三色の戦士が姿を現した。

頭部のドラゴン・ヘッド、胸部と脚部の進化クリーチャーパーツが見事にに調和した、新たな戦士。

『うおお、こいつあかつこいいぜー！！』

「す…すげえや。」

『よし、こいつの力であいつを倒せー！！』

はやとの変身した戦士は、喧嘩屋タイラーにキックをかまし、更にアルファディオス・パーツの両腕から展開した双剣でタイラーにダメージを与える。

だが、タイラーも負けてはいない。左腕のハンマーを振り回し、戦士の装甲にキツイ一撃を与える。

「くっ、あのハンマーを何とかしないと。」

勝舞ハンドは、戦士の近くに近づき、緑のカードを指さす。

どうやら、フォームチェンジが出来るようだ。

戦士はアルファディオスのカードを抜き、新たに緑のカードをセットし、スキャンする。

『ボルシャックドラゴン・シンラ・デュアルファンク!!!』

すると、胸部パーツが侍の様なパーツに変わり、腕部に刀状の武器が装備された。

「わわっ、武器が変わった!」

『そいつで早く片づけるんだ!』

戦士は刀を引き出し、タイラーに斬りつける。

ザンツ、ガキイツ!!

火花を散らし、倒れるタイラー。

『よし、もう一度スキャンするんだ。』
「わかった！」

そして、再スキャンする。

『スキヤニング・チャージ!!』

両手の刀にエネルギーが漲り、赤と緑の炎が螺旋を描いて燃え上がる。

「うおおおおつ!!」

戦士は、その刀を振り上げ、タイラーを斬りつける!!

ドウウウウウン。

炎を上げ、タイラーは消滅した。

「ふう…。」

戦士はベルトを外し、元のはやとに戻る。

『やったな!!』

「ええ…しかし、すごいですねえ。」

『ああ、こいつあすごいからな。』

『…ところで、こいつの名前、まだついてないんだ。』
「えええええっ！…な、名無し！いいいいいいっ！！」
『いちいちリアクションしなくても…。』

勝舞ハントは汗を一筋垂らす。

「では、こう名付けましょう。…仮面ライダーデュエル。」
『仮面ライダーデュエルか…。いいな、その名前！！』

こうして、この世界に新たな仮面ライダーが誕生した。

その名は、仮面ライダーデュエル！！

ターン1 END

ターン1 謎の腕と仮面ライダー（後書き）

今回のカード

ボルシャック・ドラゴン

火文明：ヘッド

仮面ライダーデュエルの核となるパーツ。

火の力を蓄えており、威力はトップクラス。

アルファディオス

光文明：ボディー

仮面ライダーデュエルの核となるパーツ。

光の力を持ち、両腕に双剣スパークカリバーを装備している。

デュアルファンゲ

自然文明：フット

仮面ライダーデュエルの核となるパーツ。

自然の力を持ち、跳躍力は150mを誇る。

シンラ

自然文明：ボディー

侍の力を持つパーツ。

腕部に双刀アシュラを装備し、斬れ味はかなりのものである。

ターン 2 先輩と放課後ともう1人のD（前書き）

はやく

「やっと次が来た…。」

XX

「今までごめんな…。」

勝舞ハンド

『いつまで待たせたんだよ！…もう最新弾が発売する一歩手前まで来てしまったぞ！！』

はやく

「しかも、勝舞さんはすでに引退してしまったし、どうするんですかあ！」「

勝舞ハンド

『まだ引退してないぜ！！』

XX

「今までずっと待たせてすいません。ようやく新刊が完成しました。」

はやく

「今回は新しい武器と新カードが加わり、何と新しい仮面ライダーも登場！」

勝舞ハンド

『さあデュエマを楽しもう！ときめくぜ！！』

XX・はやく

「それ違う人！しかも他戦隊の白いコートの人だ！！」

ターン 2 先輩と放課後ともう1人のD

「うーん、はやと君って強いねー。」

ここは、陵桜学園の学食。

昼休みにここを訪れたはやとは、ラーメンを食べ終えた後、やって来た先輩達と対戦をしていたのである。

「いや、先輩こそ大した腕前ですよ。」

「…そうかな？」

今はやとがデュエル・マスターズで対戦していたのは、桃色の髪をショートテールにした、背が小さい先輩「小早川 ゆたか」。

その近くには、おなじみ田村ひよりと、萌葱色のショートヘアが印象強いゆたかの同級生「岩崎 みなみ」が対戦を見ていた。

「…確かに、以前よりも腕は上がっているわ、お互いに。」

「そりゃそうよ、私のはやと君の師匠だから。」

ひよりは、ドヤ顔で皆にアピールしているが、実際は彼の方が腕前はよくひよりは「まあ、がんばりましょう」「レベルなのである。」
(残念!ではない)

キンコンカンコンコン…

やがて昼休み終了の鐘が鳴り、皆は学食から各々の教室へ引き返していった。

そして放課後。はやとは皆よりも早く下駄箱に現れ、靴を履き替えてゆたか達を待っていた。

「相変わらず早いツスね、はやと君は。」

「本当、まるで忍者みたい。」

「…本当に足が速いね、はやと君。」

「ええ、もう待ちきれなくて。…あれ？パトリシア先輩は？」

「あ、今日は風邪をひいてて休みツスよ。」

彼が言うパトリシア先輩とは、4月にアメリカから留学生として来日したパトリシア・マーティンの事であり、はやとは彼女からも一目置かれた存在なのである。

「そうだったんですか、残念です。」

「…私達はお見舞いに行くけど、はやと君はどうする？」

「うーん、どうしようかなあ…。」

はやとは少し考えた後、

「…僕も行きます。」

「よかったツス！では早速お見舞いの品を買っていくツス！」

商店街でお見舞いの品を買ったはやと達は、パトリシアの住んでいるアパートに立ち寄り、呼び鈴を押しした。

キンコーン

「…ホワイ？」

「先輩、僕です。はやとです。先輩達とお見舞いに来ました。」
「オー、ハヤトクンデスカ、プリーズ…」

玄関を開けると、そこには美しいブロンドのショートヘアにオーシャンブルーの瞳、スラリとした少女が立っていた。

そう、彼女こそパトリシア・マーティンである。

ただ、鼻にティッシュを詰め、頭に氷嚢を乗せた情けない姿ではあったが…。

「先輩、大丈夫ですか？」

「ダイジョウブデース。コノクライのカゼなんて、へのカツパデスネ！」

「…ひとまずは大丈夫の样ね。」

「でもパティちゃんが元気でよかったー。」

ゆたかとみなみが安心する中、

（ああ、何て萌えるシチュエーションだ！これ、絶対次の同人誌のネタになりそう…はっ、いかんいかん、自重しろ、自重しろ私イイイイイ！！）

「あ…あの…先輩？」

1人勝手に妄想して勝手に暴走するひよりと、キョトンとするはやとの姿があった。

パトリシア（以下パティ）のお見舞いも無事に済み（途中またしてもひよりが勝手に妄想して、勝手に暴走したが）皆が帰宅する、そ

の時だった。

ワアアアア！！
キヤアアア！！

住宅街の向こうから、何やら巨大な戦車らしき物体が迫ってきていた。

銅のボディに両手の6連式銃、そして巨大な3連のホイール…。

(ディオライオス・ヤミー！…まずいな、先輩の前で変身出来ないなんて！)

はやとは内心焦っていた。

今ここで変身したら、先輩に正体がバレしてしまう。しかし、見過ごす訳にもいかない…。

さて…どうしたものかと考えていると、いきなりはやとの右腕が光りだし、そこから赤い籠手のような物体が分離した。

そう、切札勝舞ハンドである。

『はやと、変身だ！』

「勝舞さん！？…でも、先輩達がそこにいますよ！いきなり現れたら…！」

『…へ？』

が、時すでに遅し。

「キヤアアアア！…う、腕エエエエ！…」

何と、3人は見てしまったのだ。はやとの右腕から現れた勝舞ハンドを。

『しまった、驚かせてしまったか!…それよりもはやと、カードだ!』

「うん、わかった!」

はやとは勝舞ハンドから3枚のコアカードを受け取り、Dドライバーを装着すると、カードをドライバーに装填しDスキャナーを手に取りカードをスキャンする。

「変身!」

『ボルシャックドラゴン・アルファディオス・デュアルファンゲ!…ボル・ファ・ング、ボル・ファ・ボル・ファ・ング!』

無数のコアカードがはやとの周りを回転し、そして変身が滞りなく完了する。

「…はやと君が。」

「変身したツスか!」

「すごい、はやと君。」

3人は、はやとの変身に啞然としていたが、勝舞ハンドが滑るようにならなくなって3人に警告する。

『おい、早く逃げろ!そこにいると、やられるぞ!』

「…えっ!?あ、ええ。」

「…わかった。ゆたか、向こうへ避難を。」

「うん、そうだね。」

「やられたら、次の同人誌のネタがパーッスよ!」

『 同人誌！？ 』

勝舞ハンドは同人誌という言葉に少しドン引いていたが、改めて向き直り、サポートのため現場に向かう。

『 はやと、待つてる！今行くぜ！！ 』

片やデュエルと言えば、ディオライオスヤミーの馬力に苦戦していた。ちなみに、この世界のヤミーは別の世界のヤミーとは違い、過去に使われていたデュエル・マスターズ（以下DM）カードに宿っていた『もつと戦いたい』という欲望が、魔力により具現化した姿なのである。

「くっ、さすがディオライオスだ。装甲が厚くて歯が立たない！」

スパークカリバーを展開して斬り結んではいるものの、頑丈な装甲により弾き返してしまうのだ。

仕方なくキックで応戦してみるも、隙間なく固められた装甲に歯が立つ訳がない。

「これでは攻めようがないな。一体どうしたら…！」

すると、勝舞ハンドが猛スピードで飛んできて、掌で生成した火炎弾をモニター部に投げつけ、ディオライオスヤミーを牽制する。

『 はやと、こいつを使ってみてくれ！ 』

勝舞ハンドが指をパチンと弾くと、デュエルの足元から台座に刺さ

った七支刀が現れ、赤く輝き始めた。

「この刀は？」

「これは『竜装・シデンレジェンド』、はやとの新しい力だ！」

デュエルは、竜装・シデンレジェンド（以下RSL）を手にすると一気に引き抜き、その勢いで台座まで砕いてしまった。赤く輝く刃、どっしりとした造り。

何より、刀身に備わった七支の部分からほとばしる真紅の炎。その全てが最強にふさわしい、王者の剣。

「こ、この刀からみなぎる力は…す、凄まじすぎる！」

『はやと、更にこいつを脚のカードと交換するんだ！』

勝舞ハンドから新たにコアカードを渡され、正面を向くデュエル。その握られたカードは、光文明の輝きを放つ、精霊王の力を宿すカードであった。

脚部のデュアルファンングを外し、新しいカードを装填しスキャンする。

『ボルシャックドラゴン・アルファディオス・アルカディアス！！』

デュエルの脚部が緑から黄色に変わり、更に小さな翼が脛から生えている。

精霊王アルカディアスの力を宿したコンボに、ゆたか達は驚いていた。

「はやと君、すごいね。」

「足の形状が、変わった…？」

「これって、まるでオーズみたいじゃない！？何か、すごい事にな

つてるツス!!」

そんな3人の視線を受け、デュエル・ボルファディアスはRSLを手にディオライオスヤミーに斬りかかった。

ドシュツ!!

鋭い一太刀が決まり、右の6連式銃を斬り離す。

『ギイイイイイ!!』

ディオライオスヤミーはヤケになって左の6連式銃を放つが、アルカディアスの持つ機動力に翻弄され、スイスイとかわされてしまう。

「すごい、これがアルカディアスの力か。…ならば、この機動力を生かして!」

デュエルはアルカディアスの力でディオライオスヤミーに肉薄し、RSLを再び叩き込んだ。

ガシャツ、ガユンツ!!

2発、3発と決まり遂には横転して動けなくなってしまった。

「さて、仕上げといこう。」

デュエルは左手でRSLの柄を握りしめ、右にDスキャナーを持ち刀身を滑るようにスキャンする。

『ファイヤー・ライト・ライト! スキャンング・チャージ!!』

R S Lに炎と光が集中し、強力な竜巻を形作る。
そして、デュエル自身が空中に舞い上がると、まるで陸上選手が華麗にスタートする様に空を滑り、R S Lを高く振りかざし一気に振り下ろす。

「ハアアアアア…セイヤアアアアア！」

『ギイイイイイ！！』

ディオライオスヤミーは真つ向から一刀両断され、爆発して果てた。

「ふう〜、何とか倒せたな。」

安堵のため息をつき、Dドライバーを外そうとした、その時。

『はやと、待て！…まだ誰がいるぞ！』

「…まだいたのか?!」

勝舞ハンドが何かに気付き、デュエルに警告した。
デュエルも急ぎR S Lを構え直し対応する。

「やっぱり感づかれたか。私って、隠れるのには向いてないねえ。」

向かいの店舗の影から現れたそれは、暖色系のデュエルとは違い、まるで深海の様な暗色系のカラーをまとっていた。

見た目はデュエルそっくりだが、右肩の装甲に鋭い刃を付けていたり、左の脛の装甲が禍々しい形をしていたりと、何から何までデュエルとは正反対に非対称な姿をしていた。

「あなたは一体、誰ですか？」

「…私は、仮面ライダーDD。」

「DD?」

DDと名乗ったそのライダーは、胸部のDリングから素粒子化した一振りの槍を取り出し、ブンブンと振り回した。

否、槍と言うより杖に近い物か。

まるで人を馬鹿にした様に舌を出した魔物の頭部を持つその杖(?)は、重力に逆らうかの様に宙に浮き、更にそこから黒い稲妻をデュエルに放った。

「うわっ、危ない!!」

「くっ、何のまねだ!」

「軽いご挨拶」

反省する気が微塵もない発言に、遂に頭にきたデュエルは、胸部のカードをシンラに取り替え、スキャン。

『ボルシャクドラゴン・シンラ・アルカディアス!!』

デュエル・ボルシンディアスにチェンジし、武器も双刀アシユラに持ち替えてDDに斬りかかるが、DDは右に左にと斬撃をかわしキックを繰り出して牽制する。

キックを繰り出しても、DDの持つ杖裁きに翻弄され、命中すらままならない。

これでは埒が開かないと感じたデュエルは、再度Dスキャナーを手にし、スキャンング・チャージを敢行した。

『スキャンング・チャージ!!』

すると、DDもDスキャナーを手にし、スキャニング・チャージを
発動する。

『スキャニング・チャージ！！』

DDの右肩のホーンから黒い障気が発生し、右腕に蛇が絡まる様に
まとわりつき、左脚部からの禍々しい装甲からも黒い障気生まれ、
右腕に絡まっていく。

デュエルの方も炎と光の力がアシユラに集まり、3色のトリコロ
ルを形成する。

「ハアアアアア…！！」

両者が一気にダッシュし、己自身の魂の一撃を繰り出した！！

「セイヤアアアア！！」

しばしの静寂が辺りを包み。
1秒が長く感じた頃。

ドサッ！！

片方が倒れ込んだ。

倒れたのは…デュエル。
はやとが、負けたのだ。

変身が解除され、ぐったりと倒れるはやと。

「！！！」

「ああ…。」

「はやと君！！！」

遠くに避難していた3人は、変身を解除されたはやとにかけより、
ゆっくりと抱き抱えた。

「…しまった、やりすぎちゃった！」

「え、まさかその声って…。」

「…お姉ちゃん？」

「あ、あはは…ごめん。」

DDはDドライバーを外し、3人に正体を明かした。

「やっぱり…。」

「先輩、やりすぎッス。」

「手加減は、したのですか？」

「うーん、手加減はしたつもりだったけど、やっぱり強すぎたかな？」

あれからどの位経ったのだろうか？

はやとが目を覚ますと、そこには見知らぬ天井が見えていた。

「ん？…ここは、どこだろう？」

「あ、はやと君、気がついた？」

「ゆたか先輩？まさかと思いますが、ここは。」

そう、はやとは泉家の、しかもゆたかの部屋で看病してもらっていたのだ。

そして、ゆたかがはやとの分の夕食を持って、自室に戻ってきたのである。

「先輩、僕は一体…。」

「ううん、今は気にしないで。それよりも、夕飯を持ってきたから食べていって。」

「ありがとうございます。」

はやとは少し照れながらも、夕食をこちそうになった。

「でも、はやと君が仮面ライダーだったなんて知らなかった。」

「…それについては、僕も未だに信じられません。まさか、僕自身が仮面ライダーになるなんて。」

「私もよくわからないけど、引き受けた以上はやとを試みたらどうかな？」

「…確かにそうですね。僕も、何もしないよりはやった方がマシだと考えています。」

夕食をいただいたはやとは、今日戦った事を心に留め、再び横になった。

まだ体中が痛むらしく、動けないからだ。

結局、翌日まで休んだはやとは、この家の主・泉　そうじろつに挨拶した後、自宅に帰って行った。

彼の父親とそうじろつは、同じ作者つながりで仲が良く、普通なら男子は入れないのだが彼はOKなのである。

（昨日はあのライダーに力押しで負けてしまったけど、次は逆転して勝ってみせる！デュエルと同じ様に！）

はやとは、心の中で誓いを立て自宅に向かっていった。

ターン 2 先輩と放課後ともう1人のD（後書き）

はやと

「さて、今回は僕が変身する仮面ライダーデュエルのスペックと新しいカードの紹介だよ。」

・仮面ライダーデュエル（ボルファング・コンボ）

身長：198cm

体重：98kg

ジャンプ力：150m

100m走：3秒

パンチ力：9t

キック力：13t

高校生の海藤 はやとがコア・カードで変身する仮面ライダー。

Dドライバーにコア・カードを装填し、Dスキャナーでスキャンする事で変身する。

見た目はオーズに似ているが、頭部は竜の意匠が強く、どちらかと言えばオーズ・タジャドルの頭部たるタカ・ブレイブ・ヘッドに似

ている。(他の部分は、細かい所を除いては似ている)
必殺技はキック技の『ボルファンク・ブラスト』

・アルカディアス

光文明：フット

キック力：6 t

精霊王の力を込めた、光文明のコア・カード。
使用する事で100mを1秒で駆け抜ける。

ちなみに、ボルシャックドラゴン(頭部)のパワーは5 t、アル
ファディオス(胸部)のパンチ力は4 t、デュアルファンク(脚部)
のキック力は8 t、シンラ(胸部)のパンチ力は5 t

ターン3 大会とDDの正体と自然のコンボ（前書き）

はやと

「さあ、仮面ライダーデュエルが始まるよ！」

勝舞ハンド

「今回は、前回登場したDDの正体が判明！しかも、新しく自然文
明のコンボも登場するぜ！」

こなた

「更に、あの桜ヶ丘高校軽音楽部もセミレギュラー入り！」

はやと・勝舞ハンド・こなた

「『』では、スタート！！！！」

ターン3 大会とDDの正体と自然のコンボ

日曜日の午前10時頃、はやとは東京駅にいた。いつもなら行きつけの「こまどり」でデュエマの大会に参加しているはずなのだが、今回だけは違っていた。

実は、彼はとある人の招待で東京に来ていたのである。

その「とある人」とは、桜ヶ丘高校軽音楽部の部員、中野 梓。超売れっ子の彼女は、デュエマの世界では名の知れたデュエリストであり、はやとはかつて全国大会の準決勝で激突し、名勝負を繰り広げた事があるからだ。

結局彼女は、はやとにタッチの差で負けたが、お互い悔いのない勝負をしたと友人に話しており、はやとも「彼女のデュエルは鬼気迫る物があった」とひより達に話している。

はやとは、東京駅の待合い場所に着くなり辺りをキョロキョロと見回し、彼女が来ているかを確認していた。

「梓先輩、遅いな。」

そう、はやとと梓は年の差が1つあり、梓の方が年上なのだ。

従って、はやとが彼女を先輩と呼んでも差し支えが無いのである。

しばらく待つ事数十分。

遠くから小さい少女が走ってきた。

黒髪をツインテールにまとめ、白いシャツに赤のネクタイとクリアム色のベスト、チェックのミニスカートに白いソックスとスニーカー、かわいらしいポーチで決めた少女は、はやとを見つけるなり右手を振りながら近寄ってきた。

「はやと君、ごめんね!。」

「梓先輩、遅いですよ。」

「あはは、ごめんごめん。…じゃ、会場に行こうか。」

何とかはやとと合流した梓は、彼の腕をつかみ会場を目指して歩き出した。

ちなみに今回ひよりは、コミケ会場で売り子をやっているため応援に行けないので、代理を応援に向かわせたとはやとに連絡しており、ゆたか達に至ってはみなみの家に誘われたため、これまた応援に行けずじまいである。

2人が試合会場についた途端、すさまじい視線がはやとや梓に注がれていた。

それはもはや殺気に近く、会場全体が『打倒 はやと』『打倒 梓』に燃えている様である。

しかし、2人はたじろぐ事なく会場に揃い踏みで踏み込む。刺し貫かれんばかりの『殺気』が漂う中、はやとと梓は別の視線を気にしていた。

その場違いの和やかな視線の先にあったのは、1人の背の小さい少女。

まるで小学生の様な背丈にポリウムのある青い髪、ちょこんと飛び出たアホ毛に泣き黒子のついたニマニマ顔。

「あの人は、まさか!」

「…こなた先輩!」

そう、今や最強のデュエリストとして名を馳せている名デュエリスト、泉 こなた。

彼女こそ、ひよりが呼んだ応援だったのである。

「はやと君、今日は大会の名目でデート？いやー、妬けるねえ。」

「えっ、そ、それは…。」

「先輩、声大きいですよ！それに、今日は梓先輩の誘いで大会に参加しているから、デートではありません！」

こなたの冷やかに顔を赤らめる様、慌てて誤解を解こうとするはやと。

「えー、そうだったんだ。私やってつきり…。」

「全くもう、こなたさんったら…。」

「ほら、そんな事をやってる暇はないよ。早くエントリーを済ませないと、大会が始まっちゃうよ！」

「あ、そうだった。はやと君！」

「ええ、早くエントリーを済ませましょう、先輩！」

手早くエントリーを済ませた2人は、各々のデッキを入念にチェックし大会本番に向けて気合いを入れ直した。

「今回こそ、負けないからね！」

「うん。お互いに、いい結果を出しましょう！」

互いに笑顔を交わし、再び対戦できる事を約束するはやとと梓。

2人は、この後発表されたブロックに移動し、試合開始まで待っていた。

ところ変わり、ここは『デュエルマスターズの世界』の一角にある、『クリーチャーの墓場』。
ここは、戦いや寿命で死亡したクリーチャー達が、メダル状のカードと化して眠りにつく、正に魂の拠りどころ的な場所である。

ゴポン。…ジャラツ。

今、ここから2枚のカードが浮上しようとしている。

それは、あたかもシャボン玉が空を目指して飛ぶかの様に、ゆっくりと。

しかし、それは邪念強き滅びの力。

その2枚のカードは、今熱戦が展開されている会場を目指し、闇の中へと消えていった。

「これでラストだ、精霊竜騎アサイラムでダイレクトアタック！」

「くっ、強い…！」

一方その頃、会場では白熱の試合が展開され、はやとは準決勝を勝ち抜け遂に決勝へと駒を進めていた。

「いきます、腐敗電腦デイス・メルニアでダイレクトアタック！」

「し、しまった！」

梓も順当に決勝へ進み、数年前以来のはやとVS梓の対戦が再び実現し、会場は盛り上がっていた。

決勝を前に、梓の様子を遠くから見ていたはやととこなたは、梓の腕前を見て感心しきりであった。

「彼女、なかなかやるねー。」

「さすが先輩、見事なプレイングです。」

準決勝の様子を見届けた数分後、こなたはデツキの確認を黙々と続けるはやとに意気込みを聞いた。

「いよいよ決勝だけど、気合いの方はどう、はやと君？」

「大丈夫です、先輩。気合いは十分入っています！」

「この様子からすると、決勝はかなり派手な展開になりそうだねえ。」

「ええ、僕だって負けられませんから。」

そして更に数分後、スタッフがはやとを呼びに来た。

決着の時、遂に来る。

「はやと君、悔いのない様にかんばってきて！」

「…はい、がんばってきます！」

はやとは、デツキの確認を終えた後こなたの応援を受け、決戦の場を目指し歩き出した。

しかし、はやとはまだ気がついていない。

2つの悪意が既に会場に迫ってきている事に。

その頃、会場の近くにある排水口から2枚のメダル型カードが飛び出し、そのまま空中に浮かび上がっていた。

そして一定の位置まで上がるとカードは鈍い光を発し、クリーチャーの姿に変わった。

一体は角の生えた盲目の女性の姿をしており、右手には骨で出来た鞭を握りしめている。

もう一体は象を彷彿とさせる下半身に、ガチガチに固い黒の鎧をま

とつた、騎士が如き風貌のクリーチャーである。
女性型のクリーチャーは『シルフィヤミー』、騎士型は『ザガン
ヤミー』と言い、共に闇文明のクリーチャーなのだ。
当然、彼らの目的は只1つ。『強い敵と戦う』ためである！

そんな事が起こっている事などつゆ知らず、はやとと梓は決勝の場
に姿を現していた。

(今日こそ、数年前の借りを返してもらおうね！)

(絶対に負けられない、たとえ相手が先輩でも！)

緊張の糸が張りつめている中、

「おーい、あずにゃーん！」

「梓ちゃん、がんばって!!！」

梓の後方から明るい声が2つ聞こえてきた。

「!?!？」

梓が驚いて振り向くと、そこには同じ部室の先輩…平沢 唯と琴吹
紬が、梓の応援に来ていたのだ。

しかも、隣にはやはり先輩の田井中 律と秋山 澪が、同じく梓を
応援するために鉢巻きを頭に巻き、声援を送っていた。

「がんばれー！ファイトだ！」

「絶対に負けるなよ!!！」

先輩4人の声援を受け、梓は顔をパンパンと叩き気合いを入れ直し、はやとの待つテーブルに向かって歩きだした。

両者がテーブルに立ち、交換シャツフルをした後デッキを右側に置き、5枚をシールドとして設置し、更に5枚を手札としてドロースる。

「デュエルロード決勝戦、スターセ「うわっ、何だありゃ!!」…え?」

司会が開始の合図をする直前、観客から声が挙がった。

はやとが何事かと外を見ると、ザガンヤミーとシルフィヤミーが街中で暴れ回っていたのだ。

しかも、この会場を目指して前進している!

「まずいな、こりゃデュエルどころの問題じゃないぞ!」

「…。」

すると、こなたが顔色一つ変えずに会場を飛び出し、ヤミーの前に立ちはだかつたのである。

「…こなた先輩!」

「こなたさん、一体何をする気なの!?!」

はやとと梓が見守る中、こなたが会場入り口まで来ると、髪からサングラスが飛び出たかと思うや宙を舞い、こなたの横に並ぶ。

「おい、何だあのサングラスは?」

「ずいぶん不気味だな。」

こなたが飛び出したと同時に、はやとも遅れて動く。

目の前のヤミーに、試合会場を荒らされては何もならない！僕が動かなきゃ、誰がやる！！

その思いが、彼を突き動かしたのである。

一方こなたは、謎のサングラスに手を差し伸べていた。

「ジョージ、コア・カードを！大至急！！」

すると、サングラス：ジョージはレンズの部分からコア・カードを取り出し、こなたに投げて渡した。

一言簡単なアドバイスを添えて。

『こなた、相手はかなり手強いぞ。気をつけてかかれよ！』

「うん、わかってるよ、ジョージ。」

ジョージに声を返すと、すでにスタンバイしたデュエルドライバーにコアカードを装填し、Dスキャナーを手にスキャンを開始した。

「変身！！」

『バイケン！バロム！エンペラーキリコ！… デュ・アール、デュール、デュール！』

無数のコア・カードがこなたの周りを回転し、やがてコア・カードはこなたと一体化し新たなライダー：デュエル・DDデュアルドライヴとして現れた。

「！！…こなた先輩！」

『はやと、何をしているんだ！急げ！』

こなたの変身を見て目を白黒させたはやとに、はやとの右腕から勝

舞ハンドが離脱し急ぐ様にうながす。

しかし、はやとは立ち止まったまま拳を震わせていた。

何故なら、前回目の前で戦っているDDに敗れた記憶があるからだ。完全にDDに弄ばれ、スキヤニングチャーシ同士の勝負にも負け。

彼の中にあつたプライドが音を立てて崩れていった、あの時。

はやとは今、ふつつつとこみ上げてくる怒りに拳を固めていた。その頃、DDはシルフィヤミー相手に格闘を始めていた。

Dラングにあるバロムのクレストが光り、両腕にエネルギーが流れていき左右にある籠手からバロムクローが展開する。

シルフィヤミーは骨の鞭を振るいながらDDに迫り、ザガンヤミーとの狭み撃ちを狙うが、DDの強化バロムクローが2体を迎撃し、何とか阻止する。

ある程度押したところで、DDはザガンヤミーにバックスピニングを決め会場から引き離していくが、次にシルフィヤミーが鞭を振るって近づいてきたりと、きりが無い。

「…はやと君？何をやっているの、手伝って！」

「…。」

そんな中、DDは遠くからはやとを見つけ、声をかけた。

その声に気づいたはやとは、勝舞ハンドに手を差し伸べ、

「…勝舞さん、コア・カードを。」

「はやと？…ああ、わかった。」

「ただし、以前使ったコンボで戦います…！」

「あのコンボを？！…わかった、気をつけてな。」

はやとは、勝舞ハンドからコア・カードを受け取るとデュエルドライバーを腰にセットし、コア・カードを装填した後Dスキヤナーでスキャンした。

「変身！」

『ボルシャックドラゴン！シンラ！アルカディアス！』

即座にデュエル・ボルシンディアスコンボに変身したはやとは、RSLを構えて何を思ったのかDDに攻撃を仕掛けた。しかも、鬼の形相を浮かべながら。

「ち、ちよつと！相手が違うよ、はやと君！」

「うがああああ！」

『おい、あいつまさか…！』

ボルシンディアスは、我を忘れてDDにRSLで斬りかかっていくが、DDは防戦一方でなすすべがない。

『はやと、止める！相手が違う！』

勝舞ハンドも止めに入るが、勢いは全く止まる事がない。

『おい止めるんだ！こなたは味方だ、敵じゃねえ！』

『ジョージ、だめだ。はやとは以前DDに負けた事があったから、それに怒っているんだ！』

『何だとおおおお！』

さすがのジョージと勝舞も、お手上げ状態である。

と、そこへ梓がはやとを探しに現れた。どうやら会場に連れて避難させる様だ。

「はやと君、はやと君はどこ?!」

このままだと、彼女まで戦いに巻き込まれてしまう恐れもある。

『仕方ねえ、勝舞！この場は任せた、俺は嬢ちゃんを止めに入る！』
『ああ、わかった！』

ジョージは仕方なく勝舞ハンドに2人を任せ、梓に近寄り警告した。勝舞ハンドも、出来る限り会場に近寄らせないために火炎弾で応戦し、牽制する。だが、しかし。

『おい嬢ちゃん、早く離れな！さもなきや、やられちまうぜ！』
「…え？ええええええっ！？サングラスがしゃべったあああああ
！！」

梓が目を白黒させるのも、無理はない。
いきなりサングラスが現れて話しかけてきたのである。

そのとばっちりは、梓の後をつけてきた4人にも影響し、特にホラ一系が苦手な澁は律の腕にしがみついてガタガタと震えていた。

「えええ…。」
「サングラスが…。」
「しゃべりましたわ！」
「怖くない、怖くない…。」

しかも、勝舞ハンドが戦いながら喋っている光景まで見てしまったため、梓達全員は言葉を失ってしまった。

『はやと、目を覚ませ！…くそっ！』
「…」「…」「…」「…」「…」

しかし、このままだと梓達まで巻き添えになってしまい、負傷者が出たら責任は免れない。

（勝舞君、ジョージ：！仕方ない、はやと君の事は後回しだ！）

DDは、止むなくボルシンディアスにミドルキックを繰り出し吹き飛ばした後、再びシルフィヤミーに向き直した。

DDの胸部にあるDサークルの中央部が光り、一振りの杖が現れDDの手に収まる。

その杖：クエイク・スタッフの悪魔を模した頭部の後頭部にあるカード・スロットルに、1枚のメダル状のカードを投入し、Dスキヤンを目の部分に当てスキヤン。

『ファイヤー！スキヤニング・チャージ！！』

クエイク・スタッフの先端に巨大な炎のかたまりが現れ、それが渦を巻いてシルフィヤミーに直撃する。

『ギヤアアアアア！！』

シルフィヤミーは炎に包まれ爆発し、更にザガンヤミーの顔面にも炎を浴びせ足止めする。

『グアアアアア！！』

「よし、後ははやと君を何とかしなくちゃ！！」

ザガンヤミーが動きを止めたその間に、DDは怒りに我を忘れたデュエルに何とか組み付き、地面に押さえつけると、はやとを落ち

着かせるためになだめ始めた。

「はやと君、落ち着いて！暴れないで！」

「があああああ、離せえっ！」

「怒りたい気持ちはわかるけど！…あの時は本当にごめんね！」

「！…えっ？」

今にも泣きそうなDDの声に、ようやく動きを止めたデュエル。それを見て更にDDは言葉をつなぐ。

「後で事情を説明するから、今はヤミーを止めるのに集中して。お願い…。」

「…うん。」

「ありがとう、はやと君。私ははやと君の味方だから、心配しないで。」

DDは、デュエルを抱え起こした後、再びザガンヤミーに向かい合い前進した。

もちろん、我に返ったデュエルもRSLを手に、後に続いてヤミーに挑んでいく。

更にジョージも駆けつけた勝舞ハンドと合流し、ホツとしていた。

『…ようやく理解してくれたな、あいつは。』

『ああ、やっとわかってくれた様だな。…っと、早くはやとの元に行かなきゃ！』

勝舞ハンドとジョージの会話を聞いた梓達は、今戦っている戦士がはやとだと知って驚いていた。

(あれが、はやと君?!…嘘でしょ?)

(はやと君…。)

(まさか、な…。)

(そんな…。)

(…。)

5人が言葉を失い立ち尽くす中、勝舞ハンドはデュエルの元に舞い上がり、コア・カードを取り出しデュエルに向けて投げた。

『はやと、こいつで行け!』

「…はい!」

黄と緑のカードがデュエルの手に収まり、改めてセットし直し、スキャン。

『ボルシャックドラゴン!アルファデイオス!デュアルファング!
… ボ・ル・ファ・ボルファ・ボ・ル・ファ・ング!』

無数のコアカードが乱舞し、やがて仮面ライダーデュエルはボルファングコンボに変わった。

「はやと君が…。」

「…」別の姿に変わった!」「…」

ここで、物わかりのいい梓は唯達に声をかけた。

「先輩、はやと君のために応援してあげましょう!はやと君は、みんなのために戦っているんだから!」

「…そうだね。」

「OK!」

「わかりました!」

「うん、怖いけど…。」

4人は、手を振ってデュエルを応援し始めた。
しかも、かなりテンション高く。

「……はやく、がんばってー!!」「……」

(先輩達が、僕のために…よし、あんな奴らに負けるものか!!)

その声に答えるように、デュエルの駆ける速さは更に力強く、速く
なっていく。

「ごめんなさい、こなた先輩。僕は、完全に迷っていました。」

「わかってくれればいいんだよ。さあ一緒に行こう、まだ敵はピン
ピンしているから。」

「…はい!!」

デュエルとDDは、足並みをそろえてザガンヤミーに向かい前進
していく。

DDはジャンプ一発で背後に回り、デュエルはザガンヤミーの正
面に立ち、RSLを構えて斬りつける。

「はあっ!!」

「ふんっ!!」

『ゲアアアアア!!』

DDのキックが後頭部を捉え、デュエルの一薙ぎがザガンヤミー
の装甲を斬り裂こうとする。

だが、ザガンヤミーの装甲は思ったより硬く、RSLでも刃が全く通らない。

「何て硬い装甲なんだ！手が…。」

「これじゃまずいねえ…。」

それからザガンヤミーの装甲を何とか破るべくRSLを突き立てようとするが、やはり装甲の硬さがネックとなり、なかなか攻略ができない。

(よし、こうなったら…！)

すると、ジョージがレンズから緑色のコアカードを取り出し、勝舞の手に渡した後連携プレーではやとに投げて渡した。

『勝舞、これをあいつに…！』

『わかった！…はやと、このカードを使え！緑のコアカードと組み合わせれば、コンボになるぞ！』

「このカードは…！ありがとう、ジョージさん！」

デュエルは、手に入れた緑のコア・カードに手持ちの1枚と合わせてデュエルドライバーの赤・黄と入れ替え、Dスキャナーでスキャン。

『グレガリゴン！シンラ！デュアルファング！…　ファアアアアア、パン・ゲ・ア・ムーン！』

Dスキャナーがカードを読み取った途端、オーケストラ調のサウンドが鳴り響き、辺りが急に闇に包まれ始めた。

そして空にはエメラルドを思わせる翡翠色の月が浮かぶ…。

「え？」
「こ、今度は何!?」
「漣、落ち着けて！」
「夜になった…。」
「!?今度は月も出た…。」
「…しかも緑色だ…。」

梓達が驚く間にも、デュエルは劇的に姿を変えていた。両腕の装甲は分離し、更に大型の籠手が代わりに装着され、脚部には堅牢な装甲が装着される。更には、頭部の額に伊達正宗を思わせる鍬形が装着され、背中に巨大な刀を背負いコンボチェンジを完了する。

緑の月の守護者、仮面ライダーデュエル・パンゲアムーンコンボ（以下、デュエルPMC）。
今、それが姿を現した。

「これが、新しいコンボ…何だか力が湧いてくる様だ！」
PMCは、背中に背負った巨大な刀『トルネード・ムラマサ』を引き抜くと、それを両手に持ち、ザガンヤミーに一太刀浴びせた。

ザシュツッ!!

疾風と共にザガンヤミーの装甲は斬り裂かれ、大量の銀色に輝くカードをばらまく。

『ギヤアアアアア!!』

『よっしゃ、回収だ!!』

『よおーし、俺だつて!!』

勝舞ハンドは一気に銀色のカードを回収し、ジョージも負けじと回収する。

結局、銀のカードはお互い半々ずつ手に入り、そのまま後方に下がっていく。

更に一太刀振り下ろし、ザガンヤミーにダメージを蓄積させていくデュエルPMCの勢いは止まらない。

すると、ザガンヤミーが左手を高々と上げ、何やら呪文らしきものを唱え始めた。

唱えられた呪文(?)に呼応するかのように、シルフィヤミーの亡骸のあったところからドス黒いオーラが立ち上り、左手に集約していき、体内に取り込まれていく。

やがて、ザガンヤミーの背後に1対の腕が生え、その生えた左手は骨の鞭を持ち異様な姿を晒していた。

『こ、こいつぁ...。』

『まずいな。...はやと、そいつの鞭に気をつけろ!!』

「はい!!」

デュエルPMCは、トルネードムラマサを強く握りしめ、再び迫る。

『ガアアアアア！！』

「…いくぞ！」

鞭と剣を振るいながら迫るザガンヤミーに、Dサークルから流れるエネルギーが脚部に流れ、高くジャンプしてかわしながらトルネードムラマサで斬りつけ、右腕を斬り飛ばす。

更に返す刃で鞭を受け止め、キックで顔面を蹴りつける。

『グオオオオオ…！』

と、そこへタイミングよくDDがクエイクスタッフにカードを装填し、スキャンしていた。

『ナチュラル！スキヤニング・チャージ！！』

ザガンヤミーの足元から蔦が伸び、鞭や剣に絡みつく。

自然文明の呪文の1種、ナチュラル・トラップだ。

『グアアアアア…！』

「はやと君、今だよ！」

「はい！」

デュエルPMCはDスキヤナーを手にすると、デュエルドライバーにあるメダルをスキャンした。

『スキヤニング・チャージ！！』

トルネードムラマサに旋風が収束し始め、風の刃を形作る。

更に周囲の風をも取り込み、収束した風の刃は徐々に太くなっていく。

スキャンニングチャージ技、『ストーム・アバランチ』。
それが今、ザガンヤミーに炸裂する。

「ハアアアアアア…セイヤアアアアアア!!」
『グアアアアアア!!』

ザガンヤミーは、風の刃による一撃を受け爆発、大量のカードをばらまいて戦いは集結した。
当然ながら、勝舞ハンドとジョージが拾いまくったのは言うまでもない。

互いに変身を解き、改めて向き直る両者。
そして、こなたは以前起こった出来事の実話を話し始めた。

実は、こなたはあの時ディオライオスヤミーを追っており、いろいろトラブルがあつて見失つてしまったのである。
ようやく見つけて撃破しようとした時、先に戦っていた者がいたのだ。

言わずもがな、それはデュエルの事なのだが、それはともかく。
デュエルの腕前を見たこなたは、彼から何か感じる物があつたため、彼の实力を見るべくわざと感づく様に近づき、そして戦つたのである。

最も、こなたにとっては『軽い挨拶代わり』のつもりだったのだが、つい本気で戦つてしまった事に加え、ゆたか達も近くにいたため、まずい状況になってしまい、どうしようもなくなつてしまったのだ。
その後、彼女ははたとを車に担ぎ込んで家に連れて帰り、ゆたかと看病をしたのは言うまでもない（それからしばらくして、こなたが

大学にレポートを提出するため席を外したが）。

「あの時、私が余計な事をしなければ…本当にごめんね。」
「先輩、もういいんですよ。過ぎた事ですし。」

とそこへ、唯達が2人の元に駆け寄り、熱烈に迎えた。

「はやと君、すごいね！まさか、あんなに強かったなんて！」

「さすが、はやと君だよ！」

「格好良かったですよ！」

「…怖くなかった？」

「ありがとう、はやと君。」

唯達に褒められ、顔を赤くして照れるはやとが、皆は『あの事』をすっかり忘れていた。

『はやと、決勝は？』

「…あーっ！忘れてたあ！」

「急いで戻らなきゃ！」

勝舞ハンドの1言で全員は、駆け足で会場に戻っていった。
決勝の続きを楽しむために。

ターン3 大会とDDDの正体と自然のコンボ（後書き）

はやと

「今回は、新しく入った自然文明のコア・カードを紹介するよ！」

・グレガリゴン

自然文明：ヘッド

パワー：4t

緑神龍グレガリゴンの力を封じ込めたコア・カード。

頭部に蓄えられた旋風^{かせ}の力を使い、かまいたちを射出し攻撃する事が出来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8822p/>

仮面ライダーデュエル

2012年1月4日11時46分発行